



TITLE:

正常妊婦並びに晩期中毒症妊婦の  
脂血症に関する実験的研究(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

松浦, 俊平

---

CITATION:

松浦, 俊平. 正常妊婦並びに晩期中毒症妊婦の脂血症に関する実験的研究. 京都大学, 1966, 医学博士

ISSUE DATE:

1966-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211778>

RIGHT:

氏 名	松 浦 俊 平 まつ うら しゅん べい
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 252 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	正常妊婦並びに晩期中毒症妊婦の脂血症に関する 実験的研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 西 村 敏 雄 教 授 三 宅 儀 教 授 早 石 修

### 論 文 内 容 の 要 旨

妊娠時脂血症は従来晩期妊娠中毒症の準備状態のごとくに考えられてはいたが、妊娠という特殊な代謝相にこれが何らかの役割を演じているだろうことは想像に難くない、よつて著者は臨床的に妊娠時脂血症の本態を明らかにすべく、正常妊婦、晩期中毒症（軽症）妊婦に高脂肪食を一定期間投与、その前後にそれぞれ脂肪乳剤を負荷し、その際の母血、絨毛組織、臍帯静脈血中における主として単純脂質と複合脂質について経時的消長を検索、投与脂質の体内利用の一端を追求した。

母血清及び臍帯静脈血清中の脂質分画構成は磷脂質（以下 P と略）が最も多く、コレステリン（以下 TC と略）、エステルコレステリン（以下 EC と略）、中性脂肪の順にこれに次いでおり、妊娠月数を追っていずれの分画も増量しているが晩期中毒症時では更に高値を示し、しかも正常時に比し TC/P は著しく高く、EC/TC は低い。

脂肪乳剤を負荷すると正常妊娠時母血中では中性脂肪が急増し負荷直後 Peak に達し以後急減して負荷後 2 ないし 3 時間で旧値に復するがごとき消長を示すのに対し、P, TC, EC 等の分画では負荷により漸増し負荷後 3 時間目に Peak に達し以後漸減して負荷後 7 時間目に旧値に復しその増加度は妊娠月数を追って大となっており、妊娠時には負荷脂質の複合脂質化が充進していることが推想される、しかしこの際絨毛組織、臍帯血中では単に中性脂肪の形において若干の脂質増加がみられるにすぎない。一方中毒症妊婦では負荷により母血中で増加した中性脂肪は急減することなく高値を保ち、P, TC 等の増加は起らず負荷脂質の複合質化は充分であると云えない所見を得た。

高脂肪食を一定期間投与後に脂肪乳剤を負荷した際、正常妊婦血中では乳剤負荷時と全く軌を一にした経時的消長を示し Peak 値は一層高い、しかし注目すべきは増加度の点からみれば軽減していることであり、負荷脂質由来の血中脂質がより速やかに処理を受けるものと解され事実この際絨毛組織、臍帯静脈血中においてすべての脂質分画が増加し、特に EC で約 45% という顕著な増量がみられており、高脂肪食投与によって始めて中性脂肪のみならず殊に複合脂質の大量が絨毛組織を経て胎児に移行している姿を瞥見

し得た。しかるに中毒症時にかかる顕著な所見は得られず、初回負荷時にほとんどみられなかった P, EC 等の増加が若干みられるにすぎなかった。

実験にあたって負荷した脂質は何れも必須脂酸に富むものであり従って以上の所見より妊娠時の脂血症は単にすべて脂質が増加しているを意味するにあらずして、その本態は複合脂質化の亢進像と解すべきであり、しかもそれが妊卵組織の發育に大いに寄与しており、しかるに同じく妊娠時でも中毒症時ではその代謝相において脂質負荷によってある程度は正常妊娠時に近接する傾向を示すとはいえ、この点の円滑性はなお充分でないものと推論することができた。

### 論文審査の結果の要旨

著者は本邦正常妊婦、晩期中毒症（軽症）妊婦に一定期間高脂肪食を投与、その前後にそれぞれ脂肪乳剤を負荷、母血、絨毛組織、臍帯静脈血中における各脂質成分の経時的消長を詳細に検討している。その結果母血、臍帯静脈血を問わず、磷脂質（以下 P）が最も多く、コレステリン（以下 TC）、エステルコレステリン（以下 EC）、中性脂肪（以下 N）の順にこれにつき月数を追っていずれも増量していくが、中毒症時では正常時に比していずれも一層高値を示し、しかも TC/P は著しく高く EC/TC は低い。脂肪乳剤を負荷すると中毒症時にみられない月数を追っての N よりも P, TC, EC における増量が正常時にみられるが、高脂肪食投与後、乳剤を再度負荷すると一層それが正常時では著明となり、この際特に絨毛組織臍帯静脈血中においては EC において約 45% という驚くべき増量がみられた。しかるに中毒症時では P, EC 等に若干の増加がみられるにすぎなかった。正常時乳剤の再度負荷に際して増加度の軽減がみられるが中毒症時それがみられないことと相あわせ正常妊娠時の脂血症は、中毒症時におけると明らかに異なり胎児の育成に寄与すべき複合脂質化亢進の一端を示すものと推論した。

本論文は学術上有益であつて医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。